

三月の記について書く

一日の記には

嗚呼、吾とは何ぞや。

如此勞苦し、如此奮激し、如此行ひ、如此思ふ、此の吾とは何ぞや。此の如き時代に、此の如き境遇に在る此の吾とは何ぞや。

嗚呼此の吾とは何ぞや。

と、ある。「吾とは何ぞや」と自己の存在の意義を問うている。独歩はいつも内省してこの世に存在する自分の

国木独歩の

佐伯での生活

(十五)

山内武麒

賛助会員

(佐伯市城下東町)

価値をはっきりさせた
いと念じていた。

二日

昨夜は学校を休む
風邪をひいたからで

ある。

今夜は燈下でカー

ライルの「英雄論」

を読んだ。「ヘスチ

ング論」が了ったら近日からこの本を使用することになったのである。

春雨軒をめぐりて繁し。

暗夜、山を燃くものあり。火焰やみを劈く。

と、外の風景を叙してある。

三日の記

一昨日の朝から次第に曇り始めた空は、とうとう夜に入って雨となり、昨日一日中、降ったり、止んだりして昨夜はささやくような小雨となって軒をめぐり、天地は静寂である。自分一人で寢床の中で、寒そうな燈の下で過ぎた日のことを色々と思ひ出して、悲しくなり、何時の間にか眠った。

次は

「嗚呼吾とは何ぞや」と呼びかけて、自分の在り方を考えている。

どうか自分がたゞ一個の小我の境遇からくる行きがかりの感情や思想のみに支配されなくて、この世に生れ出た人類同胞のこと色々と考えさせてくれ。様々な境遇、時代を考えさせてくれ、そしてたゞ一個の神を仰がさせ

てくれ、凡て神の子である他の吾を思わさせてくれ。この自然の中で生死する凡ての他の吾を思わさせてくれ。

と、小我から離れて大我に生きる自分でありたいと、切々として心情を吐露している。

今夜収二と水谷君とに手紙を認む。徳富氏にも書いた。今日午後授業がすんで尾間と山口行一の二人をつれて家に帰り大いに奨励しておいた。

大入島の紀行文を作った。

国民新聞に三国同盟のことが載っている。

あゝ国とは何か、国民や人民や人間はこれを愛しこれを考える。だから、国とは何か、人類は結局どうなるのか人を救うのは人である。神は人をして人を救わさせる。

と、国というものに疑問を持っている。

六日の記には

この頃の気候、天気には一種独得なものがある。と、その模様を次のように記してある。

天曇りて灰色一空、而かも風なくして寂然たり。雨時に私語く如く来る。忽ち止む。山岳、水蒸気を吐き半ば其の形を隠す。鳥淋しげに鳴く。蛙あちこちにふ

つゝかに鳴く。垂柳青色を春雨の中にはく。寒きが如く、暖かなるが如し。静かなるが如く、騒がしきが如し

と、春の初めの天候を叙してある。

一昨日は日曜日、この日午後、教会の諸君と一しょに散歩して臼坪の奥をさぐった。そして自分と富永と尾間の三人だけは、奥山に登り、峰を通過して平野の宝林山の上に出て、降りて帰宅した。

昨夜収二と父上から手紙がくる。今夜返事を出す。

次に

他の吾を懐ふて泣きぬ。

と書き出してまた吾について記してある。

あゝ茫々と広いこの天地の間にあるこの吾とは何か。

吾とはたゞこの一つが受くべき命運のことか。それともこの一つの肉体にまつわる境遇とか事情のことか。また、この境遇や事情によって支配される苦痛、煩悶、慾情、迷い、争いのことか。また或はこの時代やその場合に於て運命づけられた生き方のことか。

吾とはたゞ極めて小さく極めて狭い片隅に住む動物か

あゝ吾とは何ぞや。

あゝどうして吾はローマに生れなかつたのか。チベットの高原の牧者の小屋に生れなかつたのか。南洋の小島の野蠻人の母から生れなかつたのか。平氏源氏の時代に生れなかつたのか。クロンウエルと一しょに英国に生れなかつたのか。孔子とともに支那に生れなかつたのか。九尺二間の貧家に生れなかつたのか。王者の宮殿に生れなかつたのか。あゝこの命運、あゝ吾、吾とはたゞ命運の支配の下にあらわれた小さな我が、吾は何処から何処へ行くのか。凡ての人類は何処から来て、何処かへ行ってしまふ。

幻の世なるかな。此の世は幻の変化のみ。偶然の連続のみ。粹なる者、変ぜざるもの生ぜざるもの、平等なるもの、自由なるもの何処にかある。神あり焉。と、神を呼び、

この吾とは神の愛に帰るべき靈魂であり、神があつて凡ての同胞が平等を保ち、永久をうけるのである。吾とはこの信仰に立って進むこの世の生命である。

故に吾は他の吾を思うて泣く。

他の吾とは何か、凡ての人類である。等しく無窮の時

間と無限の自然との間に生を享けた同胞のことである。これらは凡て他の吾である。みなこの人々も凡てそれ自身を吾を持っている。その吾とこの吾と何の異なるところはない。

と、「吾」について追求し、神の愛を受け、他の吾を心から愛さなければならぬと説いている。即ち大我に生きようとしているのである。

七日の記にも「吾」について記してある。

過ぎ去つた人は今何処にあるか。しかし、今の人は何時かはどこかへ行ってしまふ。過ぎた人は嘗ては今の人であり、未来の人でもあつたのである。「吾」から云うならば、未来の人の世も過去の人の世も等しいのである。しかし、過去の人の世にはもうこの吾の力は及ばない。多くの隣れむべき生涯はそのまま埋められた。多くの他の吾はその悲しい命運を担つて来て、行つてしまつた。くる世もそうであろう。

だからこの吾は来るべき他の吾を愛さなくてはならない。その悲しい一生を救わねばならない。どうして救助の万分の一でも為すべきか。あゝ人類、即ちこの吾、吾

は地上の運命に泣くべきか。この吾は地上の吾の外は何事も知ることは出来ない。

と、他の吾を愛し、救わねばならないと同情の心を念じている。

次に

嗚呼吾にして若し、天の美妙を感じる能はずんば、嗚呼吾をして天の自由を感じる能はずんば、嗚呼、吾にして若し天の善を感じる能はずんば、嗚呼若し吾にして天の希望を感じる能はずんば、嗚呼若し吾にして人情の愛を感じる能はずんば、然らば嗚呼ノ吾が日々の生命は単調、遲鈍、愚昧、無味、乾燥にして一時をも堪へ能はざる可し。

寂寞ノ 然らずんば吾実には寂寞を感じず。

空原空湖の如き寂寞を感じず。寂寞は吾を氷結せしむ。と、ある。美妙・自由・善・希望・人情の愛を心から欲している。これらを感じる心が無かったら、どれ位つまらない生命であろう。寂しい一生であろうと考えている。

八日の記

歌ふものは誰ぞ。聴けよ其の幽音悲調を。

と、歌う声がどこからか聞こえてくる。その声が悲しそうに聞こえたのである。そして

あゝこの心、あの声を聞いてこのように感じるこの心の心を軽蔑してはならない。この心はどこから来てどこへ行くのか。この心をけなしてはならない。

自分の身についている凡てのものなくせよ。凡ての行為を空にせよ。それでもこの心だけは空にすることは出来ない。あゝこの心、どこから来て何処へ行くのか。天の神の心から来て天の神へ帰るのである。

自分は寂しさを感じる時がある。自分は木や石ではないことを知る。

と、もの感じる心の尊さを述べてある。

九日の記

自分は宇宙での傍観者ではない。傍観者でいることは出来ない。自分を他から観察してみよ。自分もまた人類の一員として宇宙の動きの中に抱擁されているものである。

自分は人としてこの宇宙の間に介在している。吾とは何ぞや。吾とて希臘人が貫いた歴史の意を貫くものでは

ないとは言われない。羅馬史を貫く意を貫く、支那史、英吉利史を貫く意をも貫くことが出来る。吾は人類である。自然は一つであり、神は一つである。人もまた一つである。吾は他の吾であり、他は吾の他であるのみである。吾がどうして小さな我でたゞ一時代、一境遇に生滅する幻であろうか。この無窮無極の天の下にこの生を保っている。古人はいないし、未来の人はまだいない。しかし古人はあったし、未来の者は必ずある。死とは肉体だけの境目である。無から有は生ぜず、有から無も生じない。あるものはどこまでもある。物質の裏側は靈界である。時間の裏は永久である。

嗚呼此の肉体の命、これ何ぞや

地上の人間の運命は忽諸のみ、只だ美を嘆美し善を信じ、進化を希望す、初めて靈界の消息を悟るなり。と、人の生命の意義を明らかにしてある。

次に

古人あるなし。真にあるなし。何処にかある。

想像して地球を十二回かけ巡ってみよ。古人を見ることは出来ない。想像して地球を寸断してみよ、古人はいない。たゞ烈火と土塊と冷水のみである。更に想像して

大空を縦横に飛び廻ってみよ、星、光、暗の間を空進して古人を求めても古人はいない。もう想像も出来ない。

これは想像ではなく確かな事実である。

嗚呼古人何処にかある。古人何処より来り何処にかゆきし。

あゝ吾も終には何処かへか行ってしまう。凡ての人類に何処から来て何処かへか行ってしまう。吾とはこの小さい私の煩惱であつて、人類とはたゞこの地球上ほんの僅かの間あらわれたごみのようなものか。

嗚呼不思議の生命ノ 不思議の天地ノ 恐ろしき活動。

鳥、草木、獸、星、不思議なる哉。

凡ての生命。これ何ぞ。

と、果かない生命について嘆いている。

次に、

見よ、多くの他の吾のこの地上での運命を見よ。

ポーロの運命は、クリスト、西行、ミルトン、クロンウエルの運命はどうか、そしてまた大嶋尚三、紀州乞食討死した兵士、病死した子供の運命は？

嗚呼恐ろしき現象ノ

不運災厄と罪惡と愛と義と幸福とはてしなき戦争
嗚呼恐ろしき地上の現象。

吾は此戦争の舞台なる哉。吾とは兵卒にして亦た戦
場なる哉。

と、人が運命に左右される有様を恐ろしく感じている。

昨日は天皇陛下の銀婚式で全国がにぎわった。わが国
では初めてのことである。われら教会の青年たちは教会
堂に集って祝意を表し、神にわが国の家庭の清潔を祈っ
た。式が終って懇談会を開いた。会する者は九名。

今日、水谷君、大久保君に手紙を出す。昨日水谷君か
ら病気で入院した由の報らせがあり、大久保君から今日
肺患が全快した通知があった。収二から手紙がくる。

大久保君には我国目下の状況について慨き、革命の必
要を主張した。

水谷君には上京をすゝめ、国勢が急迫したときは男子
が立つべきであると主張した。

吉見の三人の嬢たちに手紙を書き銀婚式の記念切手を
はって出した。

大久保に宛てた手紙は次のようである。

大久保の肺患の全快の報に對し、

君の目出度き報に接して何より喜れしく候 時節も
此より愈々陽春の候に差向かへば君が健康の爲めにも
益々好都合の至りと奉賀候

と、喜びをいい、そしてわが国の現状について慨き革命
の必要を説くところでは、

しかし、しかし、紛々たる哉政界。天下何れの時に
か定まらん。真に血管の革命的熱血をして沸騰せしむ
る也。余は革命党の必要を感じるものゝ発頭人なり。

革命なるかな大革命なるかな。大革命を成就せんと思
へば先ず精神的大革命を以て始めざる可からず

革命を叫び、大久保に促して

吾国は断じて革命の火を以て改鑄せざる可からず。

然らずんば断じて偉大先進国民たる能はざる也

と、断言し、世間の現状にはこんな信念を叫ぶものは一
人もない。嘆げかわしいことである。殊に田舎ほど甚だ
しいと書いて、最後に、

一生何の意ぞ戦て斃れんのみ此の故に春来れば氣昂
る。夏くれば氣昂る。冬来れば昂る。昂然として彼の
蒼を仰ぐ、熱涙を燈下に振ふ。

春くれば草木をのづと萌へいづるに、

何とて民の枯れまざるらん

此の失望的口調あれども慷慨の余りのみ。

と、結んである。

これで革命を叫ぶ若き日の独歩の熱情のほとばしりを感ずることが出来る。

十三日の記には

十日、十一日、十二日及び今日の四日間に取りたる

事実の概要を記すべし。

と、記して簡単に記してある。

十一日は日曜日、午前いつもより早く拝礼を始め早くすんだ、それから切畑村のぐんじんさんまで遠足した。

同行者七名。

昨日は「カザツク」を読んだ。また、自然、吾、他の吾、此の心、神などの題で短文を作った。近頃の自分の考えたことを書いてみたのである。

今日収二に手紙を出した。手紙の書き方について注意した。また、印刷業の件についてはなるべく早く決めるように申しやる。

水谷君から手紙がくる。返事である。彼はなお導かね

ばならない。彼はまだ空想に誇っている。考え方がまだ若い。

今日高木正雄君に手紙を書き、革命の必要性について説いた。

次に

ありのまゝを言へば

と、書き出して次のような反省録を記してある。

▽吾未だ、吾ならぬ此大自然に驚異するシンセリライ
ーを充分有する能はず。電光の如く時々閃めき来ると
雖も、忽にして電光の如く又消へ去る。未だ胸間の大
光明となる能はず。若し其の境に到着し得ば、如何に
幸なる可きぞ。電光の如く来る閃光にすら其度毎に吾
が心躍る。

▽吾未だ小我の煩惱を脱する能はず。故に慈愛救世の
大我の心未だ充分発達せず。

▽吾未だ吾が大我に立つ処のインディビデュー
リティを充分認むる能はず。故に義務責任の念薄弱な
り。即ち慨然として立たざるを得ざる独立心を懐くこ
とまれなり。

▽小我は煩惱なり。大我にして初めて真正の個人なり

と、小我を捨て、大我に立つシンセリテイな人間にならねばならぬと、自省し奮起している。独歩は大人物を指して日夜自省して真面目な人間になることに務めていた。

次に

吾ならぬ此自然、他の吾なる他の人。

これは吾の近来の警句である。と記してある。

この人類をよく見よ、多くの他の吾のこの地上での命運を、またよく見よ。吾でないこの自然を。

よくよく考えよ。この「吾」とこの「自然」との関係。この吾と自然との関係を考えて真理に到達したら、それは救世の天命を受けたものと云ってよい。

と、自然を考え、他の吾のことを考え、その関係を考えて真理を得たら世の救う天命を受けたものであると自覚している。

十五日の記

水谷君と収二に手紙を出す。

昨日徳富氏と吉見さんから手紙がくる。

徳富氏は一首の和歌と一編の漢詩とを寄せられた。

吹く風に靡きそめたる青柳の

絲の乱れをとく由もがな

今日の政界を慨いたものである。

自分はすぐその返歌を作った。

吹くからに柳の絲の乱るなれ

天の戸閉ぢるその人もがな

詩は、

人事由来不如意 休將成敗謝蒼天

静窓連日蕭々雨 零落梅花又一年

と、あった。

水谷君に出した手紙には大いに目下の危機について、或者は妄想に陥り、或者は流行するものに沈み、或者は高尚な精神を抱きながら意志が薄弱である。と戒しめた。収二には気を弱くするな。印刷業のことについて自分が解決するのがよいと思うなら電報を打てと云ってやる。

次に

吾くり返しくり返し自ら問はん。吾とは何ぞや。此

自然とは何ぞや。互に関する所は何ぞや

と、問うて、この三問は吾をして実に大我の慈愛に入り神の大愛、大光明の希望に入らしめて、人生の神聖を感

じさせる。

先ず、吾とは何ぞや

この問は、境遇、事情、慾望、利己、小我から躍然と
脱出させる。

自然とは何ぞや

この問は、吾でないこの偉大で不思議で美妙的な天地に
対して、崇敬、幽玄、高遠の念を充たしてくれる。

兩者の關係についての問は、更に突き進んで靈魂の不
滅、神の存在、その慈愛と高遠で自由とを仰がしめ、死
から不死の信仰に入らしめる。

嗚呼吾とは何ぞや

この問は、更に自分をして、他の人類、他の吾に對し
て言われないほど同情と慈愛と救済する念願を充たして
くれる。

自分の修養の基礎は決まった。

この三問をくり返しくり返して、自分の今までの不誠
実をはぎ去ろう。

この「吾」「自然」「兩者の關係」は何ぞやの三問を
くり返しくり返し自分に問うて、内省の基礎にしよう
と決めている。独歩が真面目な青年であったことをよく証

明している。

十九日の記には

吾今坐して吾が父母の家に在り。

十七日午後一時頃桂港出発 昨夜安着

と、ある。収二から帰省するよう電報が来たのであろう。
印刷業の件について解決する為めである。

次に

吾とは何ぞやと、自問自答をくり返している。吾とは
何ぞやと再三問う。この問は自分を境遇や事情の迷いか
ら脱出させる。そして悠々と自由な大氣聖界の中を逍遙
させる。この問いは吾を上帝の面前に近づかしめる。ま
たこの問いは吾を浮薄な心から、重厚で沈静な心と呼び
さましてくれる。

嗚呼、吾とは何ぞや。

二十一日

自分がこの度の帰国は印刷業創設について決断するた
めである。帰宅した晩すぐ母と口論し、ようやく賛成さ
せた。あまり高声でどなったので、市山の老婆が来て、

とうとう母にわれら兄弟の計画に賛成する方が得策であることを忠告した。

十九日の午前、古物商の東治作さんを訪うた。この人は印刷所主とわれらとの間に立って周旋してくれる人である。借用するよう申込んで帰った。

二十日の午前、河井さんを訪ね、借用出来るよう頼んで帰る。帰宅してすぐ父と相談して契約書の見本を作りこれによって相談してくれと東治作さんの処へ持って行った。

それからすぐ収二と二人で吉見家を訪ねた。途中で小川今蔵さんと出遇い、阿蘇山から持って帰った一種の焼石を土産としてあげた。そして大いに時事について話し合った。印刷業のことも話し、もしわが家の事業となったら別府方面の印刷物をなるべく頼んでくれるよう頼んだ。

今日吉見家から帰宅し、午後三ヶ岳に登った。夜は、岸の下港に出て満月と満潮の美しさを眺めた。

次にまた吾とは何ぞや、自然とは何ぞやと問うて感想を述べてある。

吾とは何ぞやの問は吾をして人と人との間の平等と同

情の感を呼び起こす。そして自然とは何ぞやの問は地球上の地理的差別を平等にしてくれる。自分は煩惱や境遇に左右されない吾でないと同時に、チベット高原での吾となり、絶海孤島の吾ともなり得る。

しかし悲しいことには、此の吾はまだ煩惱から離れることが出来ず、死を恐れる小我の煩惱に焦がれている。

と、なげき、

嗚呼愛何処にかある。美何処にかある。希望何処にかある。

自然の美は神の美なるが故に美に、人間の愛は神の愛なるが故に、誠に希望は神の希望なり。

嗚呼此の吾の此の心。此の心は自然の美の前に厳粛を感じ、幽玄を感じ、奇偉を感じず。此の心は人の情の幽音に感ず。嗚呼此の心。吾如何にしても此心をなくする能はず。

と、愛、美、希望の情にあこがれている。